

# 西日本方言で進行中の文法変化： 動詞事態が望ましい という概念をめぐる

著者	山部 順治
雑誌名	清心語文
号	5
ページ	11-23
発行年	2003-08
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000317/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000317/</a>

## 西日本方言で進行中の文法変化：

＜動詞事態が望ましい＞という概念をめぐる

山 部 順 治

### 0. 本稿の内容と構成

本稿は、西日本の方言で通時的に一連の文法変化が進行中であることを報告する。これら変化は、構文的には、動詞句の構成要素（補助動詞や動詞語尾）に関わる。

これらの変化は、意味的には、指向性を共有している。変化を被った各形態素は、その語彙の意味・主要な用法での解釈に関して、動詞事態が望ましいという意味特徴を軸に特徴付けられるようになる、とまとめられる。

これらの変化は、次の2点が言語学的に興味深い特徴である。

1. 旧来標準語あるいは東京方言と同じであった点が、異なるものへ変わる。旧来標準語あるいは東京方言と相違していた点が同じものへ変わる（標準語化）のとは向きが反対である。
2. 既存の諸形式がメンバーを変えず機能分担を変える（体系的再編成）。旧来の形式が新しい形式に取って代わられるのと異なり、気づかれにくい。

記述対象は、福岡と岡山の若年者の方言である。資料は、福岡方言に関しては、私（1965年福岡市生まれ）の内省、1991年に行った面接調査、その他の断片的・雑多な観察による。岡山方言に関しては、主に、若年の話者（1982、1983年度生まれ）を対象としたアンケート調査による。以上の資料を、インターネットの検索結果で補う。また、伝統的方言については研究文献によるところが大きい。

アンケート調査は、2002年第4～7月（第1学期）に行った。本稿では、出身が岡山県である回答者の回答のみを集計対象とする。この回答者は同一の集団の成員であるが、調査が期間内の複数回にわたったことで、人数は回により103～136で変動した（1回のみ58）。回答者集団と資料の収集・集計手順は、拙稿（2003a）のそれと同一なので、詳しくは同論文第2節を参照されたい。使用した質問票と、関連項目を含む集計結果の全貌については、紙面の制約のため割愛せざるをえない。一部は拙稿（2003a）の「付録」に含まれている。

福岡方言と岡山方言を比較すると、前者は後者より通時的变化の過程を一步先に進んだところに位置付けうる。ただし、前者の資料は、提供者が少数なため、同一方言内の変異が十分に反映されてない可能性があることに留意されたい。

本稿の構成は、次のようである。前半部分では、動詞事態が望ましいという概念を語彙の意味や主要な用法の解釈として獲得した形態素を扱う。第1節では、否定条件の動詞語尾「～な/にゃ(一)」＜～なければ＞と、肯定条件の動詞語尾「～や(一)」＜～ば＞である。第2節では、補助動詞「おく」である。後半部分では、(第2節で示された)「おく」の意味的变化に伴って生じた変化を扱う。第3節では、補助動詞「おる」に関して、第4節では、「おく」の活用形に関してである。最後に、第5節で、今後の調査研究

への展望を述べる。

本稿では、特記ない限り、“福岡方言”“岡山方言”とは、各地域の伝統的な言葉でなく、若年の話者の言葉を指すことにする。また、拙稿への言及には、繰り返しを避けるため、著者名を省いて（2002a）のように発表年のみを示す。

## 1. 動詞事態が望ましいことを語彙的特徴として含意するようになった動詞語尾

動詞事態が望ましいことを語彙的意味に含むようになった動詞語尾は、2つある。1.1では否定条件の「～な」<～なければ>、1.2では肯定条件の「～や」<～ば>を取り上げる。1.3では、この通時的変化が起こった動機付けを推定する。

### 1. 1 否定条件の動詞語尾「～な/～にゃ(一)」<～なければ>

福岡方言では、否定条件の動詞語尾「～な」の後件には、(1a)のように否定的評価の表現は来るが、(1b)のように肯定的評価の表現は来ない。すなわち、「～な」が付いた動詞の表す事態（寝る）は、望ましいものに限られる。

- (1) a. 寝らな、いかん。<寝なきやいけない>
- b. \*寝らな、いーとに。<寝なきやいいのに>

これに対して、岡山方言では、対応する否定条件の動詞語尾「～にゃ(一)」の後件には、否定的評価の表現だけでなく、肯定的評価の表現も現れることができる（2002a：11, 2003a：114）。すなわち、「～にゃ(一)」が付いた動詞の表す事態は、望ましいものであってもよく（2a）、望ましくないものであってもよい（2b）。岡山方言の例文に後続する括弧 { } 内の数字は、アンケート調査での容認度を満点が100点になるように換算したものである。

- (2) a. 勉強せにゃ(一)試験に落ちる。 [81]
- b. そーだ、寝にゃ(一)えーんじゃ。 [71]

両方言間のこの相違は、福岡においてかつて変化が起こった結果生じたものである。動詞語尾「～な」が、通時的に、望ましくない動詞事態を表す動詞に付く用法（1b）を失ったのである。

このような変化があったことは、伝統的方言との比較によっても分かる。国語国語研究所『方言文法全国地図準備調査票と地図・データ（PDF）』は伝統的方言を記録したもので、同研究所のインターネット・ホームページで公開されている。これに「行かなければ良かった」という項目がある（準備調査番号：表現法143、[http://www2.kokken.go.jp/henka1/dp/gaj\\_pre/g40m.pdf](http://www2.kokken.go.jp/henka1/dp/gaj_pre/g40m.pdf)）。地図では、福岡県内には回答地点表示がないが、その周囲（大分県、熊本県北部、中国地方、四国地方）にわたる地点には「いかな」または「いかにゃ」の回答がある。この地域分布から推して、福岡県内においても伝統的方言ではこの動詞語尾を使うと考えられる。本稿の論旨との関連で着目したい点は、動詞事態（行く）が望ましくないものと評価されている文で、「な/にゃ(一)」が使われている事実である。これに対して、私は、ここで、「～な」を使うことはない。

福岡においては、動詞語尾「～な」という形態素は、動詞事態が望ましいものであることを、語彙の意味の中に含むようになったのである。

### 1. 2 肯定条件の動詞語尾「～や(ー)」<～ば>

福岡方言では、肯定条件の動詞語尾「～や」の後件には、(3a)のような肯定的評価の表現は来るが、(3b)のような否定的評価の表現は来ない。すなわち、「～や」が付いた動詞の事態は、望ましいものとして提示されているものに限られる。

(3) a. あのソーメン、ちゃんと冷え {ときゃ/?とりゃ}、おいしかったとに。

b. \*あのラーメン、もし冷え {\*とりゃ/\*ときゃ}、ぜったいまずかった。

これに対して、岡山方言の比較的多くの話者にとっては、「～や(ー)」のが付いた動詞の表す事態は、(4a)のように、望ましいものであってもよく、(4b)のように、望ましくないものであってもよい(2003a:110)。(4b)で「ときゃー」の容認度が突出して低いことについては第2節で論ずる。

(4) a. あのソーメン、ちゃんと冷え {ときゃー/とりゃー}

うまかったのになー。ぬるくてまずかったなー。 [62/74]

b. あのラーメン、もし冷え {ときゃー/とりゃー}、ぜってー

まずかったよなー。とりあえず熱くてよかったなー。 [17/47]

両方言間のこの相違は、通時的には、福岡において、動詞語尾「～や」が望ましくない事態を表している動詞に付く用法(3b)を失ったことの結果である。

このことは、伝統方言との対照で分かる。国語国語研究所『方言文法全国地図』は伝統的方言を記録しており、これに「167あした雨がふれば船は出ないだろう」の質問項目がある。同項目は、調査結果がインターネットで閲覧できる(<http://www2.kokken.go.jp/henka1/outline/gaj/167ep.jpg>)。福岡県各地(を含む西日本)に「降りゃー」の回答がある。本稿との関わりで注目すべきは、動詞事態(雨が降る)が望ましいという評価を与えられていない(むしろ、動詞事態が望ましさに関する評価と無関係である)文において、「～ゃー」が使われていることである。これに対して、私は、ここで「降りゃ」を使うことはない。

福岡においては、「～や」という形態素は、動詞事態が望ましいものであることを、語彙の意味の中に含むようになったのである。

### 1. 3 通時の変化の動機付け

動詞語尾「～な」「～や」に関して1.1, 1.2で観察した通時の変化について、それが起こった動機付けを考察する。この変化は、方向性に関して、意味の漂白化ではなく、逆に、意味の要素を獲得したというものである。このような変化について、一般には、形態素それ自体の属性に動機付けを見出すのは困難である。

ここで注目の点は、この変化が条件文の中核的な機能への特化だ、ということである。条件文という構文の主要な機能は、単なる論理的関係の表示でなく、動詞事態の望ましき・望ましくなさ(desirability)の表示である(赤塚1998)。それは、言語習得の順序や、テキスト中の頻度として観察される。これら動詞語尾は、それを含む構文の

(定義的でないが) 典型的な意味の特徴 (の一つ) を、語彙の意味として取り込んだ。つまり、変化の動機は、形態素自体の属性にではなく、形態素が生起する文という環境の属性にあったのである。

## 2. 補助動詞「おく」

補助動詞「おく」は、西日本諸方言において、事態が望ましいことを表している用法を獲得した。ここでは、特に、「おく」に動詞語尾「～な」「～ゃ」が後続している事例に注目する。【「おく」の全用法を総括するしたがって抽象的な意味については、(2001)を参照。本稿で注目するのは、「おく」が主要な諸用法にわたって表出するより具体的な概念である。両者とも心理的実在である。「おる」(第3章)に関しても同様。】

西日本諸方言では、補助動詞「おく」は、非意志動詞を取ることができる。その場合、主動詞の動詞事態を望ましいものとして提示する (2002a, b, 2003a)。福岡方言から (5) (6) に例を示す。

(5) おまけくらい付い {とかな/?とらな}、いかんよねー。

(6) あのソーメン、ちゃんと冷え {ときゃ/?とりゃ} おいしかったとに。

補助動詞「おく」自体がこのような意味解釈をもたらしていることは、岡山方言の次の事実が直裁に示す。この方言では、「おく」は、(7a) のように、動詞事態 (おまけが付いている) が望ましいものである場合には使える {68} が、(7b) のように、動詞事態が望ましくない場合には使いにくい {17~38}。動詞語尾は、(a) (b) と同じ「～にゃ(一)」であることに留意されたい。なお、「おる」の使用は、動詞事態の望ましさに影響を受けない (7a) {61}, (7b) {68~72}。

(7) a. 割り引きになってねーんだから、おまけぐれー

付い {とかにゃー/とらにゃー} いけんよな。 {68/61}

b. こんなしょーもねーおまけなら、付い {とかにゃー/とらにゃー}

えーのに。おかげで値段高くなっちゃってしまってるじゃん。 {17~38/68~72}

同様な観察が、動詞語尾が「～ゃ(一)」の場合 (4) でも可能である。(4a) では、動詞事態 (スイカが冷えている) が望ましいものであり、「おく」は使える {62}。(4b) では、動詞事態 (ラーメンが冷えている) が望ましくない場合であり、「おく」は使えない {17}。「おる」は、「おく」ほどには動詞事態の望ましさに影響を受けない (4a) {74}, (4b) {47}。

なお、福岡方言では、(1) で示したように、対応する動詞語尾「～な」は動詞事態が望ましい場合に限られる。このため、(7b) に相当する「～な」を使った文は、補助動詞が「おく」であれ「おる」であれ不適格である。【岡山方言でもそのような話者がいる。(4a) の「おる」に比べて (4b) の「おる」の容認度がやや低いのは、動詞語尾「～にゃ(一)」を (4b) のような場合に使わない話者が少数いるためである。】

(5) (6) などのように補助動詞「おく」が非意志動詞に付く用法は、若い世代の特徴である。福岡市とその郊外については1930年前後以降生まれの話者で見られる (2001: 59, fn.5)。つまり、通時的に、西日本の方言において、補助動詞「おく」は、動

詞事態が望ましいことを表す用法を追加したのである。

動詞語尾の意味（第1節）、「おく」の意味（第2節）についてこれまで論じたことを合わせると次のことが言える。福岡方言では、必要や願望を述べる基本的な構文（5）（6）において、事態が望ましいという情報は、3要素（補助動詞「おく」、動詞語尾「～な」、後件の述語「【否定条件に後続する】いかん」）により、その明示的に、表示される。同情報を表示する文中要素“✓”は、方言間で相違する。（4）－（7）に対応する標準語の表現は「付いてなきゃいけない」「付いてりゃいい」。

	補助動詞	動詞語尾	後件の述語
福岡方言（5）（6）	✓	✓	✓
岡山方言（4）（7）	✓		✓
標準語			✓

通時的変化の方向は、より明示的に表示する（＝✓がより多い）状況へ、である。

### 3. 補助動詞「おる」

補助動詞「おる」は、標準語で「（て）いる」によってカバーされる意味領域では、補助動詞「おく」と系列的な選択関係に立つ。第3節では、「おる」に起こった用法・意味変化を記述する。3.1では、岡山・福岡の若年者による判断、3.2ではインターネット文書から資料を収集する。3.3では、これらを伝統的方言について文献で報告されている資料と対照する。

#### 3. 1 若者の方言

補助動詞「おる」は、西日本の方言では、動詞事態が望ましさに関して評価されている場合には、さまざまな程度で避けられる。その程度は、方言によって、また、文が単文か複文かという構文的特徴によって異なる。

福岡方言では、次のようである。まず、（8）のように、文が単文である場合には、「おる」は使われない（2001）。これに該当するのは、（8a－c）のように主動詞が意志動詞の場合が多いが、（8d）のように主動詞が非意志動詞の場合もある。

- （8） a. しばらくここに立つ |とこー/\*とろー| ！  
       b. 待つ |とき/\*とり| ！  
       c. もうちょっと、寝 |とき/\*とり| たい。  
       d. おまけぐらい付い |とけ/\*とれ| って言いたい。

また、（5）（6）や（3a）のように、文が複文である場合には、「おる」はあまり好まれないという程度である。「おる」の使用についての判断は、話者によって異なり、“（「おく」とともに）適格”から“（「おく」は言うが）言わない”の間に来る（2001：70）。

「おる」に係る（8）のような制限は、通時的には革新的な特徴である。福岡では1930年ごろ以前生まれの話者（年配の話者）には、同様の制限はなく、「～とろー！」「～とりー/とんしゃい！」などが自然な会話で聞かれる（2001：55, fn.17）。

この方向の通時的変化は、福岡方言だけでなく、他の西日本方言でも進行中のようだ。

(9) のように、岡山方言では、単文の場合には「おる」が避けられる傾向が認められる(2003b)。

- (9) a. あたし、ここにしばらく座っ {とこー/とろー} っと！ [97/20]  
b. うろちょろせんで、じっと座っ {とき/とり} なよー。 [86/33]  
c. ここにしばらく座っ {ときてー/とりてー} なー！ [95/34]  
d. このスイカ、もっとちゃんと冷え {とけ/とれ} ！って感じねー。 [82/29]

複文の場合には、同傾向は認められない。(4a) (7a) での「おる」/「おく」の使用についての判断は、“OK/OK” と “OK/\*” の回答が大部分を占め、“\*/OK” はないと言ってよい。

福岡方言と岡山方言の間では、複文が「おる」を排除する程度が相違するようだ。これは、従属節の動詞語尾が語彙の意味に関して相違する(第1節)ことに対応する、と考えられる。福岡方言では、従属節の事態が望ましいことは、従属節の動詞語尾によって表示されている。つまり、「おる」と同一節(従属節)内で表示されており、この特徴に関する限り複文は(8)の単文と同類である。これに対して、岡山方言では、出来事の望ましいことは、従属節の動詞語尾自体では表示しない。つまり、他の節内で(主節の述語を中心とする構文により)表示され、複文は(9)の単文と一線を画す。

なお、(8) (9) のような単文に観察を限定すると、「おる」が排除される場合は、動詞事態が意志的である場合と、近似的に重なる。しかし、「おる」が排除される場合を規定する概念は、評価の様相(望ましさ)であり、生起の様態(意志性)でない。殊に、「おる」(ないし、主動詞+「おる」)を非意志動詞だと想定すること、そのような想定によって「おる」の排除を説明することは、いずれも記述的に不適當である。このことを、以下で簡単に確認しておく(2001も参照)。

第1に、「おる」を非意志動詞だと想定できない。可能の助動詞「られる」が付くのは意志動詞に限られることが知られている(原田1973: 34-36, 井島1991: 153-156)。「られる」は、(10) のように、「おる」に全く容易に付くことができる。【これは、「られる」が、動詞の事態について、価値評価ではなく、概略、ある状況における生起の余地を(“ものごとの客観的配置”として)問題とするからである。】

- (10) あの授業、面白くないよねー。

あたし、90分もじっと、座っ {とけん/とれん} わー。 [85/85]

第2に、「おる」を非意志動詞だと想定したところで、(8) (9) で「おる」が排除される現象は説明されない。命令形は、たしかに命令の用法では動詞の意志性を要求するが、願望の用法では意志性から独立である。「おる」は、(8d, 9d) のように、願望の用法においても排除される。【修辭的に、願望の用法は“話し手の意志性”を含意すると言えよう。しかし、定義的には、“意志性”とは“動作主の意志性”を指す。】

### 3. 2 インターネットの検索結果

(8) (9) のような場合に「おる」が避けられる傾向は、インターネットの検索によっても見て取れる。インターネット文書の著者の言語的経歴は大部分が断定不可能であるが、件数の半分程度では、文脈の言葉遣いや(日記や掲示板の書き込みでは)言及されている事物から西日本とのつながりが推測される。インターネットの検索には、



Googleの検索エンジンを使用した。http://www.google.co.jp/

表1では、動詞(1～6行)・命令表現の動詞語尾(a～h列)に関して、補助動詞「おる」「おく」の検出件数を一覧にした。比較のために、右端2列を加えてある。「とれ」「とけ」は、大部分の事例が命令表現だが、「とれば」「とけば」など異質なものを少数含む。「とれん」「とけん」は、命令表現でなく可能表現である。

(表1)

		a	b	c	d	e	f	g	h		
		とれよ とけよ	とれや とけや	とりー ときー	とりや ときや	とりね ときね	とりんさ い/とん さい ときん い	とりな い/ ときな い	とり/ んなさ い ときな さい	とれ とけ	とれん とけん
1	立つ	1 20	2 3	0 0	0 2	0 0	0 0	0 0	1 12	205 116	1 0⑥
2	寝る	8 469	19 79	0 29	2① 95	0 3	0/0 6	0 0	3 198	220 883	25 0
3	座る	3 48	5 12	0 10	1② 8	0 1	10(10/0) 2	1(0/1) 0	1(1.0) 15	61 213	4 0
4	じっとする	16 46	16 11	0 4	0 20	0 2	0 1	0 0	1.0 35	157④ 206⑤	39 0
5	待つ	349 498	216 201	12 35	49 155	0 3	15(15/0) 6	0/0 5	1 0 (9/1)	739 887	17 1
6	しがみつく	1 8	1 2	0 0	0 1	0 0	0 0	0 0	0 0	2 19	0 0

件数は、「似たページ」を除く。検索を行った日付は、第1～4, 6行が2003年3月、第5行が5月。①「寝とりやがる!」と「人の女房寝とりやがって、このやろう」各1例を除外。②「座ったりやーすよ」1例を除外。③「元気にしとりやすか」1例を除外。④157のうち、1割(10件に1件)程度が「じっとしとれん」または「じっとしとれるか」。他の動詞(立つ、寝るなど)では、この種の異質例の検出はない。⑤206件中には、「じっとしとけん」「じっとしとける」はない。⑥検出された5例すべて除外。いずれも「寝とけ、ん...」であり、「ん」は動詞語尾でない。

補助動詞「おる」の例を(11a)に、補助動詞「おく」の例を(11b)にあげる。表中の動詞に「おく」が付いている例の大半は、(11b)のように、標準語では「(て)いる」で訳され、「おく」で訳されない。(これらの動詞は、主語の状態変化を表す。標準語ではこの種の動詞に「おく」が付く機会は頻繁ではない。)

(11) a. ザ・黒之巢会～又丹の憂鬱

「くっ、どうしたことだ? 体がうごかん!」

「アンタなあ、まだ起き上がったらアカンはや。せっかくパジャマ着てんのやから、おとなしゅう寝とりや」

www1.sphere.ne.jp/hikou/katoo/kuronosu5.htm



b. 今月のフューチャー店

素敵な友だちを紹介したいから、3人で一緒に飲もう！と約束しときながら、MAKは風邪でダウンしたとのメール。どうやらのどが痛くて声も出ない様子。/「しゃあないなあ、家でおとなしく寝ときやあ」というわけで、...

[www.dynac-japan.com/feature/kansai/](http://www.dynac-japan.com/feature/kansai/) 【関西地区の飲食店の体験レポート】

表1で、斜線も影もないセルが、「おる」<「おく」(=「おる」の件数が「おく」の件数より少ない)場合に当たる。このようなセルが表中で過半数を占める。斜線のセルは「おる」「おく」とも検出例のなかった場合。影付きのセルは「おる」>「おく」(=「おる」の件数が「おく」の件数より多い)場合で、表中に5つのみである。

この大勢に反している箇所が2つ目に入る。これらには別段の説明が可能である。第1に、f列の動詞語尾「～んさい」だけは、「おる」>「おく」となっているセル(影付きのセル)が2つある。これは、この語尾が古風な語感を持つことで、伝統的方言で使われる「おる」が共起しやすくなっている、と推測できる。

第2に、欄外の「立っとなれ」「立っとなけ」では、「おる」>「おく」(2倍近い)のも目に付く。内訳も大多数が命令表現である。逆転は、周囲のセルと比較するとはっきりする。まず、動詞「立つ」でも他の命令表現では、「おる」<「おく」(数分の1)。また、この列でも他の動詞では、「おる」<「おく」(動詞「座る」では4分の1近い)。

これには次のような説明が可能である。「立っとなれ」は、学校の教師の威圧的態度を象徴するステレオタイプの表現である。書き手は、教師らしさを演出する常套句として使っている。その傍証として次の事実をあげうる。—「立っとなれ」212件のうち、(12)のような「廊下に立っとなれ」「廊下で立っとなれ」が合わせて半数以上(115件)を占める。これに対して、「立っとなけ」130件のうち、「廊下に立っとなけ」「廊下で立っとなけ」は合わせて24件にとどまる。—

(12) 続 ふるさと ちょっとむかしの話 第22話

「コラー。お前らあはさっきから何しとるんだア。全然学問に性根が入ったらん。廊下に立っとなれエ」

先生に怒られて、二人でシブシブ廊下に出て並んで立ちます。休み時間になると、下級生が通りがかりクスクスと笑っています。

「先生え、恥ずかしいで顔洗ってもいいですか」

「アッカン。そのまま立っとなれ」

[www2.nkansai.ne.jp/kasumi/hanashi/hanashi22.htm](http://www2.nkansai.ne.jp/kasumi/hanashi/hanashi22.htm) 【兵庫県城崎郡香住町役場のホームページ】

表1の最右列は、可能表現である。ここでは、a～h列と対照的に、全セルで「おく」<「おる」である。つまり、1～6行の動詞は、一概に「おく」と結合しやすいわけではなく、殊に命令表現の場合にそうなのである。また、可能表現の資料は、「おる」を排除する意味特徴は意志性ではないこと (§3.1) の確認にもなる。

意志用法の動詞語尾「～(よ)う」についても、命令表現と同じ傾向が認められる。表2のa, c列を見られたい。比較のため、b, d列に「～(よ)う」の仮定・推量の用法について検出数を示す。

(表 2)

		a	b	c	d
		とろう とこう		とろ とこ	
		意 志	仮定・推量	意 志	仮定・推量
1	立 つ	0 2	0 0	0 6	1 0
2	座 る	0 12	1 (0, 1) 0	1 16	0 0
3	寝 る	3 653①	6 (2, 4) 0	5~6 ② 321 ③	7 (1, 6) 0
4	じっとする	0 32	0 0	0④ 25	0 0
5	待 つ	0 135	2 0	4 133	3 (1, 2) 0
6	しがみつく	0 2	0 0	0 6	0 0

件数は、「似たページ」を除く。括弧（ ）内の数は（仮定，推量）の内訳。検索実行日付は、第1，2，5行が2003年3月、第3行が4月、第4，6行が5月。「とろ」「とこ」の検出例には、それぞれ「とろー」「とこー」の例は含まれるが、「とろう」「とこう」の例は含まれない。したがって、aとc列での重複、あるいはbとd列での重複はない。①検出655例のうち不確かな2例を除く。②6例のうち1例は不確か。③検出323件のうち「ておく」でないものの2件を除く。321のうち3割程度で、「早く・はよ・さっさと」「今のうちに・寝れるときに」などが動詞「寝る」に先行。このような場合の「寝とく」は、標準語において「寝ておく」に対応し、「寝ている」に対応しない、すなわち、この方言において「寝とる」と競合しない。④「じっとしてろ」の誤記1例を除く。

(13) に意志の用法の「おる」「おく」の例を示す。

(13) a. River is running Time is passing

「・・・・・・そうか・・・・・・。今回の空襲はひどかったけえ。たすからなかったのかももう。」

「違う！絶対来るっていうたもん・・・・・・」

「・・・・・・わかった。んじゃあ、わしと一緒に待っとろ？」

わしらは橋げたにのっかって、ずっとずっとの母さんを待っていた。

来るはずの無い人を・・・・。

[www.amigo.ne.jp/~maririnn/dream/d\\_river.html](http://www.amigo.ne.jp/~maririnn/dream/d_river.html)

b. 日記10月21日

あ～（＞－＜） 来週部活の試合があるけ今週はいい加減真面目に練習でらんな一。 来週彼氏に会えんしー。 帰ってきてくれてもイーのにさー☆ 帰ってきてくれるの待っとこー（＊＾＾＊ あしたは超早起き

しまーす☆

k-free.com/dydo/nikki21.html

(14) の (a) と (b) に、それぞれ、仮定と推量の例を示す。「おる」のみが使われる。

(14) a. @ home drama 7月

『停車中!』の  $\sigma(\cdot\_)$  アタシにむかって言うんです。 $\sigma(\cdot\_)$  アタシは「待ってるだけでもダメ?ですか?」とやさしく聞いてみた そーしたらおまわりさんは「ダメに決まっとるじゃろー 待っとろーが何しょーろーがあダメじゃわあ!!!」と言い放ちました。寝起きの  $\sigma(\cdot\_)$  アタシに向かってです!!!

gin4571.hp.infoseek.co.jp/newpage8.htm 【広島県の主婦の日記】

b. 虎鉄誕生日SS!

「…やっぱ、お前バカたい」(オレもやけど。)[虎鉄、今日泊まりきい]  
「マジDe!?!」「ちゃんといつべん家に帰ってきーよ?おばさんたち多分準備してお前んこと待っとろーけん、それば無駄にせんように。」

www.geocities.co.jp/Bookend-Ryunosuke/6662/mataatode.htm

表2のa列とc列、すなわち、「～(よ)う」の意志の用法において、「おる」は圧倒的に用例が少ない。いずれのセルでも、「おる」<「おく」となっている。

### 3. 3 伝統的方言との比較

以上では、話者による判断とインターネット上の用例においては、ある文法領域で、「おる」が排除される傾向を観察した。この観察は、工藤(1999)の西日本諸方言についての概観的記述とは対照的である。(11-13)のような環境において「おく」「おる」両方が使用されることが、多寡に関する注記なく、報告されている。

トク/ヨク [=補助動詞「おく」] は、話し手(1人称)の意図性を明示する必要がある場合に特に使用される。トル/ヨル [=補助動詞「おる」] は、意図性の有無に関わらず(3人称であっても)使用できるからである。(p.10) 【各括弧[ ]内と下線は私が付したもの】

(15) さきにいっとキ(いっとケ)/いっとリ(いっとレ)。 (工藤1999:10)

同論文で記述対象となっている話者の年代は、方言研究の慣行から推測して、伝統的方言か、壮年以上の世代の話者の言葉であろう。したがって、通時的变化の段階としては、同論文は本稿より保守的な状態を記述していることになる。

以上、第3節での観察は、次のようにまとめられる。補助動詞「おる」は、元來は動詞事態の望ましさに関わりなく使われていたが、若者の世代では動詞事態が望ましさに関する評価の下に提示されている文から撤退しつつある。この変化は、西日本各地で起こっており、地域によって進行の度合いに差がある。

「おる」の用法縮小・意味変化は、「おく」の(4a)(5)(6a)(7)のような文への用法拡張からの帰結だ、と考えられる。「おる」と「おく」は、系列的な選択関係にある。そこで、次のような通時的過程が想定できる。「おく」の使用の可能・不可能の領域は、伝統的方言では(標準語でと同様に)、概略、事態が“意志的かどうか”という基準で区

切られていたが、若年者の方言では、事態が“望ましいと評価されているかどうか”という基準で区切られるようになった。(それに従い、(4a) (5) (6a) (7) のような以前「おる」だけが生起していた領域へ進出した。) そうすると、「おる」は、望ましさに関して事態が評価されている事例においては、この情報を明示的に表す「おく」によって阻止されるようになった(用法縮小)。運用上のコスト(音韻的長さ・単語数など)が同じならより明示的な表現を使え、とでも述べる語用論的配慮からである。それに続いて、「おる」について、分布範囲は語彙の意味の反映であるとの仮定のもとで帰納的推論が行われ、結論として、望ましさに関する評価と無関係という意味特徴が導き出された(意味変化)。【「おる」は、動詞事態が望ましくないという意味特徴を獲得したのでないことに注意。】

#### 4. 補助動詞「おく」の音便形

補助動詞「おく」は、用法(分布)の面での変化(第2節)とともに、形態の面では音便形の活用形を変えた。この変化がもたらす文法体系の特徴について述べる。音便形の代表として「～て」形を取り上げる。

補助動詞「おく」は、岡山の方言で、「～て」形では、動詞事態の望ましさを表出する機能を、限られた程度で持っている。このことは、(16)の3文の比較により示される。「といて」は、動詞事態が望ましい場合(16a)では、使うとの回答は少ないが見られる{30}。ここを基準に、あまり望ましくない場合(16b) {14}、望ましくない場合(16c) {7}へと移るにしたがい、容認回答数は半減していく(2003a)。【岡山方言では、ほとんど全員の話者が、補助動詞「おく」の「～て」形として「といて」「とって」の両方を持つ(2002a)。】

(16) a. スイカがちゃんと冷え {?といて/とって} よかったね。

冷蔵庫、壊れた(と) 思ってたけど。 {30/95}

b. このラーメン、冷え {??といて/とって} も結構いけるじゃん! {14/93}

c. あのラーメン、冷え {\*といて/とって} まずかったよね。 {7/94}

福岡方言では、(16)の3文に当たる文は比較の余地がない。いずれでも、「とって」が使われ、「といて」は使われない(2001)。これは形態論的理由による。この方言では、補助動詞「おく」の通用の「～て」形は、「とって」だけであり、「といて」ではない。補助動詞「おる」の「～て」形も、同じく「とって」である。かりに、「おく」が使用されているとしても、そのことは音形上で見て取れない。

私にとっては、補助動詞「おく」の「～て」形で実際に使う語形は、「とって」のみであり、「といて」ではない:「このゴミ、捨て {<sup>OK</sup>とって/\*といて} !」。「といて」という語形については、構造的な逸脱性を全く感じないが、省みると実際には口にしない。大多数の話者による判断は、使わない“\*”からまれに使う“?”までの間に位置するようである。他の音便形「～た」「～たら」なども、上述に関して「～て」と並行的である。【2001の情報提供者の1人(1965年生まれ、1991年調査)は、「とって」「といて」とも普通に使う。彼のような判断をする話者は、若年の話者の中では少数派のようである。】

歴史的には、補助動詞「おく」の音便形が「とっ」であるのは、革新的な特徴である。

伝統的方言では、「とい」であり、「とっ」ではない（早田1985：61）。

「おく」が音便形「とい」を失う変化は、前節までで扱った一連の変化と、因果関係にあるのかどうかは不明である。ここでは、変化の結果として至る状況に関して、文法領域が事態の望ましさの表出という機能に関して二極化した状態、と形容できることを指摘する。他の一連の変化により、音便形以外の一群の構文環境では、「おく」「おる」間の選択によって、動詞事態が望ましいものとして提示されているのか・望ましさに無関心なのか表明されるのが原則になった。その一方で、この形態的变化は、「おく」「おる」の選択結果を音形上示さずに済む文法領域を作り出す。音便形の構文環境では、この基準にかんする選択と表明が回避されるようになるのである。

## 5. 今後の調査研究への展望

以上、西日本方言では事態が望ましいという概念を軸に文法の再編が進行中であることを指摘し、福岡方言を岡山方言と比べてより多く変化過程を進んだところに位置付けた。最後の節では、今後の調査で検証すべき課題を2点述べる。

第1は、意味記述の精密化である。本稿では、(i) <動詞事態が望ましさにに関して評価されている>と、(ii) <動詞事態が望ましいと評価されている>の2概念を、区別に注目せず文脈に応じて使い分けた。両概念は、論理的には、異なるもので、(i) の特殊な場合が (ii) である。補助動詞「おく」については、両概念間で多義的だと、暫定的にはあるが考えている。具体的な意味解釈において現象するのは、大まかに言って、(8) (9) のような単文での用法では概念 (i)、また、(4) - (7), (16) のような複文での用法では概念 (ii) のようである。両概念間の両義性は、他の語でも見られる。例えば、「評価する」という語は、(i) <評価判断の対象にする>と、(ii) <肯定的評価を与える>を意味することができる。同様に、「望ましき」は、(i) <望ましいかどうか>と、(ii) <望ましいこと>を意味することができる。両概念のつながりは、(i) 一般的な場合と、(ii) 無標な特殊な場合のつながりの一事例である。

第2は、通時的再編が起こった（おそらく複数の）動機付けの解明である。これに関しては、以下のような共時的・通時的な文脈が考慮されるべきである。

提示された一連の変化はいずれも、標準語と同形であった体系から、それと異なる形の体系へ、という方向に進行することに注目したい。標準語の状況は次のようである。「寝なきやいいのに。」「もし冷えてりゃ絶対まずかった。」は可能（第1節）、「スイカが冷えとかなきゃいけない。」は不可能（第2節）、「（おる）に相当する「いる」を使って」「立ってよう！」「待ってなさい！」は可能（第3節）、「おく」の音便形は「といて」（第4節）。したがって、動機付けは標準語からの影響（外的要因）だと考えられない。変化が生じた方言に内在する（内的要因）はずだ。【標準語でもすでに、上記動詞語尾に対応する動詞語尾は、動詞の事態が望ましいことと意味的連関を持つ。まず、肯定「～ば」は、ある場合に限れば、帰結節が悪い結果を表す文で使われにくい：「この薬を飲めば<sup>OK</sup>気分がよくなります/ \*気分が悪くなります」。】（蓮沼他2001：5 - 6）。また、否定「～なければ」については、省略的な文「寝なきや。」では、後件に「よい」でなく、「いけない」が省略されていると理解さ

れる。】

事態の価値評価がそれを専門的に表す動詞形によって表示されるという特徴は、類型的に、現代日本語文法の全般的性向であることを想起されたい。具体的には、補助動詞「やる」「もらう」「くれる」などは、肯定的な価値評価を表し、また、迷惑受身や補助動詞「やがる」「しまう」は、否定的な価値評価を表す。本稿で見た通時的変化は、この性向を（西日本の伝統的方言や標準語から）さらに一歩進めるものと見ることができる。また、この現代日本語の特徴は、歴史的には、古典語から現代語への過程において発達してきたものであることにも注目したい。以上の事実を背景にすると、本稿の指摘する変化は、時間的・空間的に広い範囲にわたる文法変容の流れの一端として位置付けられるのではないだろうか。

\*この論文のもとになっている研究は、(財)中島記念国際交流財団 平成14年度日本人若手研究者助成、およびノートルダム清心女子大学 平成15年度学内研究助成を受けて行われた。アンケート調査で資料を提供してくれた、勤務校の学生諸君に感謝する。

## 文献

赤塚紀子 (1998) 「条件文とDesirability」 赤塚紀子・坪本篤朗『モダリティと発話行為』 pp.1-97, 研究社。

井島正博 (1991) 「可能文の多層的分析」、仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』 pp.149-189, くろしお出版。

工藤真由美 (1999) 「西日本諸方言におけるアスペクト対立の動態」『阪大日本語研究』 11, pp.1-17。

蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法セルフマスターシリーズ7 条件表現』 くろしお出版。

早田輝洋 (1985) 「博多方言のアクセント・形態論」九州大学出版会。

原田信一 (1973) 「構文のレベル意味のタイプ」『国語学』 92, pp.33-48。

山部順治 (2001) 「補助動詞「おく」の意味」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語日本文学編』 25, pp.53-78。

\_\_\_\_\_ (2002a) 「岡山市とその近郊の若者の日常生活語における」、補助動詞「おく」「おる」の文法的使い分け：ノートルダム清心女子大学英語英文学科の学生を対象とする質問票調査の報告」『ノートルダム清心女子大学紀要文化学編』 26, pp.14-36。

\_\_\_\_\_ (2002b) 「岡山市とその近郊の日常生活語における、補助動詞「おく」の用法」『日本方言研究会第74回研究会発表原稿集』 pp.17-24。

\_\_\_\_\_ (2003a) 「補助動詞「おく」が表す、事態の価値評価：岡山市とその近郊の若者の日常生活語からの資料」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語・日本文学編』 27, pp.83-118。

\_\_\_\_\_ (2003b) 「岡山方言の、進行相を表すことができる3つの補助動詞「～よーる」「～とる」「～とく」」『日本方言研究会第76回研究会発表原稿集』 pp.25-31。

(やまべじゅんじ／本学英語英文学科講師)